

デイヴィッド・コパフィールド2015 決定稿

原作／C.ディケンズ（中野好夫訳）

構成・演出／清水友陽

第一部

【1】

19世紀、ロンドン。
煙突からモクモクあがる煙。
いたる場所から、労働者たちが集まって来る。
倉庫で樽に瓶を詰める人々。
町の音、作業の音、罵声……
ぼろぼろのデイヴィッド（青年）が来る。
やがて立ち止まり、倒れ込むデイヴィッド。
ベッチーと、ジャネットがいる。

デイヴィッド 始めまして、お婆さん。
ベッチー 行っておしまい。子どもの来るところじゃないのよ。
デイヴィッド 僕デイヴィッド・コパフィールドです。
ベッチー まあ……
デイヴィッド 僕が生れた晩に、お婆さん、家へいらして、母さんにお会いになったでしょう？

ディックが、風を揚げながら、やって来る。

ディック ただいま。
ベッチー ディックさん、笑いごとじゃないのよ。ブラダストンの死んだ甥のことは話したでしょ？
ディック ええ。確かに聞いたことがありますな。
ジャネット この子がその長男なんですよ……父親にそっくりじゃありませんか。
ディック ああ、息子さんですか？甥っ子さんのね。なるほど！
ベッチー お伺いしたいのはね。この子、一体どうしたらいいかってことなんですよ。
ディック さあ、わたしでしたら、そうですねえ……まず湯につかれせますねえ。
ベッチー ジャネット！ディックさんの言う通り。すぐお湯を沸かして！

【2-1】

音楽1（ゴウゴウという風）

森、鬱蒼と生い茂る木々。
家の窓から漏れる明かり、クララの泣く声。
ベッチーがやって来て、窓から中を覗く。
お腹が大きいクララ、その横にペゴティー。
ベッチーは「扉を開ける」という仕草。

ベッチー こんばんは。
クララ どなたですか。
ベッチー ミス・トロットウッドだよ。名前くらいは聞いたことがあるでしょ。
クララ お婆様？
ベッチー （ペゴティーに）あっちへ行っておいで。

ペゴティー、出て行く。
泣き出すクララ。

ベッチー ちょっと、ちょっと、ちょっと。泣くのはよしとくれ。さ、顔を見せとくれ……（クララの顔を見て）まるで赤ん坊だねえ。
クララ この子が生まれても、わたし、赤ん坊のままかも知れません。
ベッチー うちの甥っ子は、よっぽどあんたを甘やかしたんだろうねえ。
クララ 亡くなった主人のことを悪くいうのはやめてください。

クララ、再び泣き出す。
ベッチー、クララの髪を撫でる。

ベッチー ……それで。いつなの、生まれるのは？
クララ なんだかさっぱり分かりませんの。身体中がぶるぶる震えて。わたし、死ぬんじゃないかしら。
ベッチー 死にはしませんよ！あんたには立派な女の子を産んでもらわなくちゃ。
クララ まだ、女の子かどうか分かりませんわ。
ベッチー 男なんて絶対ダメ。よけいな口答えなんかするもんじゃないの。女の子が生れたらね、すぐわたしが力になってあげるわ。名前ももう決めているのよ。わたしと同じ、ベッチー・トロットウッド・コパフィールド。

クララ、産気づく。

ベッチー あらららら。
部屋に入って来る、ペゴティー。

ペゴティー 奥様！チリップ先生！

すぐにチリップ先生を連れて来る。

チリップ先生 ひとまず、二階へ。

クララを二階へ連れて行く。
ひとり取り残されるベッチー。
チリップ先生、暖炉から湯を持って行こうとして。

ベッチー どうなの？
チリップ先生 まずまずでございます。
ベッチー ふん。

チリップ先生、二階へ去る。
赤ん坊の泣き声。
チリップ先生が、降りて来る。

チリップ先生 おめでとうございます。
ベッチー どうなの、娘は？
チリップ先生 すぐに、よくなりますよ。まだ、お若い
ですから。
ベッチー 違う違う。赤ん坊の方ですよ。あの娘はどう
かって聞いているんじゃないの？
チリップ先生 娘？
ベッチー 娘。
チリップ先生 立派な男の子ですよ。
ベッチー 男の子。

ベッチー、チリップ先生の顔を睨みつけ出て行く。
クララが、赤ん坊を抱いてやって来る。

音楽2 (クララの歌)

ニレの木陰の ちいさなおうち
ちいさな暖炉に おそろいの椅子
おおきな窓には ちいさなあなた
ゆれる林を見つめてる
緑のはっぱは 波のよう
並んだ鳥は 船のよう
浮かんで沈んで どこまでも
木漏れ日浴びて どこまでも

【2-2】

赤ん坊から、デイヴィッド (少年) へ。
マードストーンが訪ねて来て、クララを連れ去る。

デイヴィッド ねえペゴティー。
ペゴティー 何です、デイヴィ坊っちゃま。
デイヴィッド ペゴティーは、結婚したこと、ないの？
ペゴティー まあまあ。なんでまたそんなことを？
デイヴィッド 一度に二人とか三人とかの所にお嫁に行
っちゃいけないでしょ。
ペゴティー そりゃ、いけませんとも。
デイヴィッド でも、相手が死んだら、別の人の所に行
ってもいいでしょ。
ペゴティー そりゃ、行きたいと思えばね。
デイヴィッド ペゴティーならどうするの？
ペゴティー ……
デイヴィッド 怒ったの？

ペゴティーは、デイヴィッドを抱きしめる。

デイヴィッド 痛いよ、ペゴティー。
ペゴティー ねえ、デイヴィ坊っちゃま。わたしと一緒に、
ヤーマスにいる兄のおうちに、二週間ばかり遊び
に行くというのはどうです？
デイヴィッド ヤーマス？
ペゴティー 海のそばです。とても素敵な町ですよ。
デイヴィッド でも、母さんはどうするの？
ペゴティー あら、坊っちゃまご存知ありませんの？
奥様は二週間ばかり、お隣りの家に泊まりにいらっし
やるんですよ。
デイヴィッド それなら僕、行きたい！

パークスの馬車が来る。
クララ、デイヴィッドを抱きしめ、キスする。

クララ ……ごめんね。デイヴィ。
デイヴィッド どうしたの、母さん？
クララ ううん。行ってらっしゃい。
ペゴティー さあ、坊っちゃま。

【3-1】

馬車は、木々を抜け、やがて海へ。

SE (波)

音楽3 (ヤーマス)

船乗りたちが、作業をしている。
ハムが迎えに来る。

ペゴティー 甥のハムでございます。
ハム ようこそ！ ヤーマスへ。

ハムはデイヴィッドをおぶり、歩く。
船の家。
明かりが灯っている。

ハム あれがわしらの家だよ。
デイヴィッド あの船みたいなのが？

ガミッジとエミリーが、船の外で出迎える。

ガミッジ ようこそ、おいでくださいました。何もお構
いは出来ませんが、ゆっくりしてください。
デイヴィッド こんな素敵なお家に呼んでいただいて、
幸せです。
ガミッジ ほれ、エミリー。
エミリー ……
デイヴィッド こんにちは。
エミリー (ガミッジの後ろに隠れる) ……

ペゴティー なに照れてんだい、この娘は。さあ、坊っ
ちゃま。晩ご飯にしましょう。

船の中に、ダンがいる。

ダン よお、姉ちゃん！

ペゴティー 久しぶり、ダン！

ダンとペゴティー、抱き合う。

ペゴティー 坊っちゃま。この人が、この家の主人の、
ミスタ・ペゴティーですよ。

ダン ようこそ、坊っちゃま！ママさんは、お元気で？

デイヴィッド はい、元気です。

ダン たった二週間ですが、こいつらと、仲良くしてや
ってください。

食事が始まる。

デイヴィッド ペゴティーおじさん。

ダン なんです？

デイヴィッド ハムって名前にしたのは、おじさんがこ
の方舟に住んでるからつけたの？

ダン そうじゃありません。それに、名前をつけたのは
わしじゃありませんよ。

デイヴィッド じゃあ、誰がつけたの？

ダン ハムは、わしの兄貴のジョーの息子なんです。海
で溺れて死にしまったんですよ。

デイヴィッド じゃあ、エミリーは？おじさんの子ども
なんでしょ？

エミリー ……

ダン エミリーは、わしの義理の弟のトムの子どもなん
ですよ。

デイヴィッド 死んじゃったの？

ダン 海で溺れて。

デイヴィッド おじさんには子どもはいないの？

ダン わしはひとりもんなんで。

デイヴィッド (ガミッジを見て) え？じゃあ……

ガミッジ、泣き出す。

ダン この人はガミッジさんだよ。

ガミッジ どうせあたしや、亭主に先立たれた、はみ出
し者ですよ。

ダン 元気出せよ、母ちゃん。

ガミッジ いっそあたしや、救貧院に入って死んだ方が
いいんですよ。

ダンは、ガミッジを連れて行く。

ペゴティー いつものことです。死んだ亭主のことを考
えているんですよ。

デイヴィッドとエミリーを残し、去る。

【3-2】

外へ出る、二人。

デイヴィッド エミリーは船に慣れてるんでしょ。

エミリー 海は怖いわ。

デイヴィッド 僕は、怖くない。

エミリー ……わたし、海が大きな船をひきさいたのを
見たことがあるの。

デイヴィッド ……お父さんが乗った船？

エミリー 父さんのことは、何も憶えてない。

デイヴィッド 僕もだよ。

エミリー あなたのお父さんは紳士でしょ。お母さんも
立派なレディー。わたしの父さんは漁師。母さんも漁
師の娘。わたしを育ててくれたダンおじさんも漁師。

デイヴィッド エミリーは立派なレディーになりたい
の？

エミリー になりたい。お金があれば、みんなを楽させて
あげられるもの。

デイヴィッド いい考えだね。

エミリー 海が怖くない？

デイヴィッド 怖くない。エミリーだってそうでしょ。

エミリー こんなのは怖くないわ。

エミリー、突然、棧橋の先端まで走る。

エミリー でも、風が吹いて目が覚めると、ダンおじさ
んのことやハムのことや心配になって来て、ぶるぶる
震えるの。大声で助けを呼んでるような気がするの。

デイヴィッド 危ないよ！

エミリー わたし、立派なレディーになりたいの！

デイヴィッド エミリー！

エミリー、デイヴィッドの所に戻って来る。

エミリー 好きよ、デイヴィ。

エミリー、デイヴィッドにキスする。

見送る、ダンたち。

ダン お元気で、坊っちゃま。

デイヴィッド さよなら、エミリー。

エミリー またね。

デイヴィッド 手紙を書くよ。

[3-3]

デイヴィッドとペゴティー。

ペゴティー デイヴィ坊っちゃん……ちよつとお話することがございましてね。

デイヴィッド どうしたの？

ペゴティー もっと早く申し上げるとよかったんですがね。いい機会が見当たらず……奥様が……

デイヴィッド 母さんがどうかしたの？死んじゃったの？

ペゴティー 新しいお父様がお出来になったんですよ。

[4]

風を持った、ディック。

そばに、デイヴィッド（青年）がいる。

ディック それは、私が想像するに……たいそうびっくりしたでしょうな。

デイヴィッド はい。

ディック そうでしょう、そうでしょう。

デイヴィッド 家に入りましょうか、ディックさん。

ディック コパフィールドさん。

デイヴィッド はい。

ディック これ、どう思います？風としてですよ。

デイヴィッド ……いい風ですね。

ディック わたしがこさえたんですよ。今、書いている回想録を貼りあわせて。

デイヴィッド 回想録？

ディック わたしの回想録です。だが、書き出してはみたものの、どうもうまく書けないのです。チャールズ一世が、いつもわたしの頭の中に入って来て、邪魔をするんですよ。

デイヴィッド 頭の中？

ディック チャールズ一世が首をはねられたのは、いつでしたっけ？

デイヴィッド 1649年です。

ディック 本には、そう書いてある。だが、そんな昔に死んだ男が、どうやってわたしに話しかけて来るって言うんでしょうね？

デイヴィッド ……そうですね。

ディック まあいい。まだまだ時間はたっぷりあります。風糸はどっさりありますから。こいつを高く揚げると、事実も一緒に、遠くへ飛んで行きます。そんな風にして、わたしは、事実をばらまくんです。どこへ落ちるかは、分からない。そのとき、そのときの風まかせですよ。運にまかせてやってみるんですよ。

[5-1]

ブランドストーンの家。

クララとマードストーンがいる。

デイヴィッド（少年）は、家の中に入る。

マードストーン さあ、クララ。落ち着いて。気を落ち着けて。（手を差し出し）デイヴィ、元気かい。

デイヴィッドは、二階の自分の部屋へ。

クララとペゴティーが追いかけて入って来る。

クララ どうしたの？デイヴィ。

マードストーンが入って来て、クララを抱きしめる。

マードストーン クララ、落ち着いて。先に下に行ってるんだ。わたしはデイヴィと一緒にいくから。（ペゴティーに）お前、奥様の名前は知っているだろうね？

ペゴティー コパフィールド様です。

マードストーン これからはマードストーン様だ。よく憶えておくように。

二人、去る。

マードストーン デイヴィッド。言うことを聞かない馬や犬がいたとしたら、わたしはどうすると思う？

デイヴィッド さあ。

マードストーン ひっぱたく。痛い目に合わせて、縮み上がらせてやる……さあ、一緒に下へくるんだ。

[5-2]

ジェインがやって来る。

マードストーン ジェイン姉さんだ。

クララ 始めまして。

ジェイン この方、あなたの息子さん？

クララ デイヴィッドです。

ジェイン わたし、男の子は好きじゃないんですけどね。こんにちは、坊や。

デイヴィッド ごきげんよう、お婆さん。

ジェイン 随分お行儀知らずなんですね。

クララ すみません。

マードストーン 君の為にわたしが姉さんと呼んだんだ。

ジェイン わたし、できるだけあなたの苦労を省いてあげようと思って来の。あなたったら、ほんとに綺麗だけど、ひどく呑気そうなもの。この家の鍵もみんな、わたしにお預けになりませんか？

クララ でも、ここはわたしの家ですので……

マードストーン わたしの家だって？

クララ いいえ、わたしたちの家ってつもりでしたの。

ジェイン エドワード。こんな話は、もうやめにしましようによ。わたしは、明日帰ります。

マードストーン 姉さん、黙ってくれないか。わたしは、君の人間性を鍛えてあげようと考えて、ジェイン姉さんと呼んだんだ。家政婦代わりをしてくれると言っているんだよ……君に対する気持ちも、冷めていくようだ。

クララ いやいや（マードストーンに抱きつき）……わたしが欠点だらけだと言うことは、よく分かっていますの。お姉様、もう何にも不平は申しません。

【5-3】

音楽4

部屋の雰囲気が変わる。

マードストーンが鞭を持って立っている。

デイヴィッド、教科書を読む。

クララが、答えを耳打ちする。

ジェイン クララ。

クララ ……

デイヴィッド、再び教科書を読む。

再びクララが、答えを耳打ちする。

ジェイン クララ。この子、何も頭に入っていないじゃないの。

クララ 本当はちゃんと頭に入っているんです。ね？デイヴィ。

デイヴィッド ……

マードストーン チーズ屋に行って、ひとつ四ペンス半のダブル・グロスターチーズを五千個買ったとしたら、支払いはいくらだ？

デイヴィッド ……

クララ、泣き出す。

ジェイン クララ！

マードストーン デイヴィッド、一緒に来い。

クララ デイヴィ！

ジェイン クララ！

マードストーン、デイヴィッドを二階へ連れて行く。

デイヴィッド マードストーンおじさん！ぶたないで！勉強はしたんです、でも、出来ないんだもの、おじさんとお婆さんがそばにいちゃ！

マードストーン 出来ないだと！

マードストーン、デイヴィッドに鞭を振るう。

デイヴィッド、逃げようとして、手に噛みつく。

マードストーン ぎゃあ！

マードストーン、デイヴィッドに鞭を打つ。
その場に倒れる、デイヴィッド。

【5-4】

ペゴティーが部屋の外にやって来る。

ドア越しに話しをする二人。

ペゴティー デイヴィ坊っちゃん。

デイヴィッド ペゴティー？母さんはどうしてるの？僕のこと、怒ってる？

ペゴティー 怒ってなんかいらっしやいませんよ。

デイヴィッド 僕は、どうなるの？

ペゴティー 明日から、学校に行くんですよ。ロンドンの近くの……この所、前のように、お世話出来ませんでしたけれどね……わたくしは、いつでも坊っちゃん味方ですよ。

デイヴィッド、泣き出す。

ペゴティー 奥様のことは、お任せください。わたくしが、いつまでも、おそばにおりますから。

【6-1】

バーキスの馬車が来る。

デイヴィッドを抱きしめる、クララ。

マードストーンとジェイン。

クララ さよなら、デイヴィ。これもみんな、あなたのためなのよ。休みになったら、帰ってらっしやいね。

ジェイン クララ。

クララ よく悔い改めるんですよ。

ジェイン クララ。

馬車が走り出す。

音楽5（バーキスのテーマ）

どこからかペゴティーが来て、馬車に乗り込む。

無言でお菓子とお金をデイヴィッドに渡す。

力強く抱きしめて、いなくなる。

バーキス ……あのひとがこさえたのかい？

デイヴィッド ペゴティーのこと？

バーキス ああ。

デイヴィッド お菓子も料理も、みんなペゴティーが作るよ。

バーキス いい男は、いねえのかい？

デイヴィッド ペゴティーに？

バーキス ああ。あの人にだ。

デイヴィッド 多分、いないよ。

バーキス あの人に、手紙を出すだろ。

デイヴィッド 出すよ。

バーキス その手紙に、忘れないで書いてもらいて
えんだよ。

デイヴィッド 何を。

バーキス ……バーキスが待ってる。

デイヴィッド バーキスが待ってる、だね？

バーキス バーキスが待ってる。

デイヴィッド 明日はブランダストーンに帰るんでしょ？
自分で言えば？

バーキス バーキスが待ってる。

遠くに、ロンドンの町が見えた。

【6-2】

路地。

メル先生がいる。

メル先生 新入生というのは、君だね。

デイヴィッド はい。

メル先生 わたしは、セイレム学園の先生なんだが。

デイヴィッド (頭を下げる)

歩き出す、二人。

デイヴィッド 学園は遠いんでしょうか。

メル先生 もう少しだ……おなかは空いてないかい？

デイヴィッド はい。とても。

救貧院に婆さんがいる。

婆さん まあまあ。

メル先生 この子になにか食べさせてやりたいんだが。

婆さんは、パンとミルクをくれる。

音楽6 (メル先生フルート)

デイヴィッド、うつらうつらする。

婆さん、メル先生を抱きしめる。

メル先生 行こう。

【7-1】

セイレム学園の門。

門の横に、義足の男、タンゲー。

メル先生 新入生だよ。

タンゲー ねえ、メル先生。あんたがお出かけになっ
てから、靴屋が参りましてな。こんな靴、もう修繕はき
かねえって申しましたぜ。第一、もう元の靴が残って
やしねえ。よくこれで修繕頼んだもんだって、そう言
うんでさあね。

タンゲーは、メルの方へ靴を放り出す。

二人は、門をくぐり教室へ。

デイヴィッドは机の上に置いてある札を見つける。

「御用心、噛みつきます」と書いてある。

デイヴィッドは驚き、教室を見回す。

メル先生 何をしているんだい？

デイヴィッド すみません。犬を捜していたんです。

メル先生 犬？どんな犬だい？

デイヴィッド 「御用心、噛みつきます」って。

メル先生 それはね、犬じゃない。子どもだよ。これ
を、君の背中にぶら下げないように、言いつけられてい
るんだ。

メル先生は、デイヴィッドに札を結わえる。

タンゲーが、やって来る。

タンゲー 校長先生がお呼びだ。

【7-2】

三人は校長先生の部屋へ行く。

鞭を持った、クリークルがいる。

クリークル (小声) こちらへおいで！

タンゲー こちらへおいで！

クリークル (小声) 向こうをむかせてごらん。

タンゲーは、背中の文字をクリークルに向ける。

クリークル わしはね、お前のお義父さんをよく存じあ
げている。まことに立派な方だ。そしてお義父さんも
わしのことをよく存じておられる。ところで…… (小
声) お前は、わしのことを知っておるかね？

タンゲー お前は、わしのことを知っておるかね？

クリークル (小声) ええ、どうだ？

タンゲー ええ、どうだ？

デイヴィッド いえ、まだよく知りません。

クリークル (小声) だが、すぐにわかるじゃろうて。

タンゲー だが、すぐにわかるじゃろうて。

クリークル (小声) わしがどんな人間だか、言ってや
ろう。

タンゲー わしがどんな人間だか、言ってやろう。

クリークル (小声) いったんやると言ったら、必ずや
ってみせる。またやらせると言った以上は、必ずやら
せずにはおかん。

タンゲー やらせると言った以上は、必ずやらせずには
おかん。

クリークル、鞭を振り、いなくなる。

【7-3】

大勢の子どもたちがやって来て、デイヴィッドの札を見て馬鹿にする。
スティアフォースがやって来る。

子どもたち スティアフォースさん！
スティアフォース ひどい侮辱だ！

スティアフォース、デイヴィッドの札を取る。

スティアフォース 彼を侮辱するのは、僕を侮辱するの
と一緒に……新入生のデイヴィッドだね。

デイヴィッド はい。

スティアフォース 君のことは僕が面倒を見るよ。困っ
たことがあったらなんでも言ってくれ。（握手する）

デイヴィッド ありがとうございます。

スティアフォース さあ。今夜は、デイヴィの部屋で、
歓迎会と行こうじゃないか！

子どもたち （歓声をあげる）

メル先生が来る。

子どもたち、メル先生をからかう。

メル先生 静かに！

教室が、一瞬、静まりかえる。

スティアフォースが口笛を吹く。

メル先生 静かにしろ、スティアフォース君！

スティアフォース 先生こそ、静かに！

メル先生 掛けたまえ。

スティアフォース 先生こそ掛けなさい。

メル先生 知っているんだよ。君がリーダーで、下級生
たちに、わたしをからかうよう命令していることを。

スティアフォース 先生のことなんか考えたこともあり
ませんよ。

メル先生 この世の幸せに恵まれない人間を、わざわざ
侮辱するというのは、実に卑怯な行為だぞ。

スティアフォース 先生は僕を卑怯と言う。でも、先生
こそ乞食じゃないですか。

メル先生が、スティアフォースのそばに寄る。

クリークルとタンゲーがやって来る。

クリークル メル先生。我を忘れてカッとなってるじゃ
なからうね？

メル先生 ……

スティアフォース 先生は、わたしを卑怯だと言いま
した。僕は冷静さを失い、先生のことを乞食だと言いま
しました。どんな処罰でも喜んで受けるつもりです。

クリークル 君の率直さは、本当に立派だ。しかし、仮
にも、このセイレム学園で働いている人間に対して、
乞食呼ばわりすると言うのは……

スティアフォース では、先生にそうじゃないと言っ
てもらいましょう。

メル先生 ……

スティアフォース 僕が言っているのは、先生の身内の
ことなんです。

メル先生、デイヴィッドの肩に手を置く。

スティアフォース つまり、先生のお母さんが、救貧院
暮らしをしているってことなんです。

クリークル ……今の言葉は本当なのかね。

メル先生 何も訂正することはありません。

クリークル 君は、職場を間違えていた。今日限りで、
出て行ってもらいたいね。早ければ早いほどいい。

メル先生 今が、それにふさわしいですね。

メル先生、再びデイヴィッドの肩に手を置く。

メル先生 ジェイムズ・スティアフォース。きっといつ
か、君のしたことを深く恥じる日が来るよ。

メル先生、去る。

クリークル （小声）セイレム学園の、独立と品位のため
に。

タンゲー セイレム学園の、独立と品位のために。

クリークル （小声）スティアフォース君の勇気に感謝
する。

タンゲー スティアフォース君の勇気に感謝する。

クリークル （小声）惜しげない、拍手を！

タンゲー 惜しげない、拍手を！

生徒たち、拍手する。

クリークル、スティアフォースに握手を求める。

【8-1】

バーキスの馬車がやって来る。

音楽7（バーキスのテーマ）

デイヴィッド 元気そうだね、バーキスさん。

バーキス 大きくなったな。

デイヴィッド あれから半年経ったからね。
バーキス バーキスが待ってる。
デイヴィッド え？
バーキス バーキスが待ってる。
デイヴィッド それは伝えておいたよ。
バーキス そうか。
デイヴィッド いけなかった？
バーキス うん。
デイヴィッド ことづてがいけなかったの？
バーキス いや、ことづてはいいんだ。だが、それつきりじゃねえか。
デイヴィッド それつきりって？
バーキス 返事がないじゃねえか。
デイヴィッド 返事を待ってたの？
バーキス 待ってたさ。半年の間、ずっと、毎日。
デイヴィッド 言ったの？
バーキス え？
デイヴィッド 返事が欲しいって。
バーキス そんなこと、言えねえよ。
デイヴィッド 僕から言えってこと？
バーキス そりゃ、何なら言ってもらってもいいがね。

ペゴティーが来て、抱きしめる。

デイヴィッド ただいま！ペゴティー！
ペゴティー デイヴィ坊っちゃん。気をしっかりして、聞いて下さい。奥様が今朝、息を引き取られました。

【8-2】

墓。

SE (教会の鐘)

喪服を着た、マードストーンとジェイン。
参列者の姿。

【8-3】

遠くに、クララの姿。

音楽8 (クララの歌)

ペゴティー お母様は、だいぶ前から、お悪くいらしたんですのよ。いろいろお気がかりのこともあって、決してお幸せじゃございませんでした。いつもたったひとり、ポツンと座って泣いていらっしやいました。お亡くなりになる一週間あまり前に、こんなことをおっしゃいましたっけ。「わたしが眠っている間、ずっとそばにいてね。神様、あの哀れな子をお守り下さいますように」

デイヴィッド これからどうするの？

ペゴティー この家にはいられないんですよ。ヤーマス

へ帰ります。いつでも遊びに来てください。あそこは坊っちゃんまの二つ目めのお家なんですから。
デイヴィッド もう会えなくなるのかと思った。
ペゴティー とんでもない。わたくしの息のあるかぎり
は、いつだってお目にかかりに参りますとも。
デイヴィッド ペゴティー。
ペゴティー 何です？
デイヴィッド 返事が欲しいって。
ペゴティー え？

デイヴィッド、バーキスを連れて来る。
バーキスは、ペゴティーの荷物を持ってやる。

ペゴティー もし、このペゴティーがお嫁に行くということにでもなりましたら、坊っちゃんは、どうお考えになります？
デイヴィッド 馬車があれば、いつでも会いに来られるね。

ペゴティーとバーキス、去る。

デイヴィッド 母さん。
クララ ごめんね、デイヴィ。

クララは、デイヴィッドを抱きしめ、去る。

【8-4】

マードストーンとジェインがやって来る。

マードストーン デイヴィッド。過去のことは、くよくよ考えていても仕方がない。

ジェイン 今のあなたみたいにね。

マードストーン 姉さん、黙って。お前のような子どもは、労働社会の習わしにしたがって、叩き直してもらうべきだ。

ジェイン 強情なんてのは、困りものだからね。

マードストーン 姉さん、黙って。お前は、もう相当に教育も受けた。これ以上学校に通っても、何の役にも立たん。待っているのは世間との戦いだ。住まいは手配しておいた。

ジェイン 費用はこっちで出してあげるんだからね。

マードストーン 姉さん、黙ってたら。いいか、デイヴィッド……

ジェイン 明日から、ロンドンで働くのよ！

マードストーンとジェイン、去る。

【9-1】

ロンドン。

倉庫で働く、デイヴィッド（少年）。
ミコーバーがやって来る。

ミコーバー コパフィールドの坊っちゃんですな。いかがです、ご機嫌は？

デイヴィッド ありがとうございます。あなたはご機嫌いかがですか？

ミコーバー ありがたいことに、わたしも至極元気ですよ。ところで、マードストーンさんから、お手紙をいただきまして、私どもの家の一部屋に……もちろん、今、そこは空いておりますが……つまり、要するに、その……貸間でありますな……要するに……その部屋をあなたの寝室として、お使いいただくと言うわけで。えへん。申し遅れました、わたくし、ミコーバーと申します。えへん。

デイヴィッド 始めまして。

ミコーバー お見受けしたところ、この首都ロンドンのことも、まだ、さほどお詳しくないようですな。神秘的な近代のバビロンを通り抜けて、シティーロード方面にたどり着くのも……つまり、わたしがそこに住んでいるわけですが……要するに、道に迷われるかもしれませんから……私が一番の近道でお連れしてさしあげましょう。えへん。

ミコーバーについて歩く、デイヴィッド。
ロンドンの町並み。

音楽9（ミコーバーのテーマ）

【9-2】

ミコーバーの家。
エマと子どもたちがいる。

エマ わたしもね、まさか下宿人を置かなくちゃならないような貧乏生活を送ることになるなんて、両親と一緒に暮らしてました時分は、思ってもみませんでしたわ。でも、なにぶん、主人は困ってますので、わたしの気持ちなんてものは、やっぱり、捨てなくちゃなりませんわねえ。

デイヴィッド そうでしょうね、お婆さん。

エマ しかも、今が一番困ってるらしいんですの。果たしてうまく、この事態を切り抜けられるかどうか、よくわかりませんのよ。困るなんてこと、どんなことだか、両親と一緒に暮らしてました時分は、思ってもみませんでしたわ。経験ってものは、恐ろしいものですわねえ。

突然、ドアを叩く音。

訪問者1 いるんだろう！今日こそ払ってもらおうぞ！

ミコーバー ーっ！

みんな、身をひそめる。

訪問者1 隠れるなんて、卑怯だぞ！泥棒！

ミコーバー さらば、我が人生！

ミコーバー、剃刀を持ち出し、首筋にあてる。

エマ、なんとかミコーバーを止める。

訪問者1、諦めて、いなくなる。

ミコーバー もう安心だ。さあ、新しい友と、乾杯と行こうじゃないか。

エマ そうね、あなた。

エマ、隠していたラム酒を用意する。

ミコーバー それでは、親愛なるコパフィールド君の、新しい門出を……

突然、ドアを叩く音。

訪問者2 国税の督促でうかがいました。いらっしゃるんでしょ？

ミコーバー ーっ！

エマ、その場に倒れる。

ミコーバー、介抱する。

訪問者2 明日、また伺いますからね。

訪問者2、諦めて、いなくなる。

ミコーバー もう安心だ。腹が減ったな。

エマ そうですね。夕食にしましょうか。

エマ、隠していたラムチョップを用意する。

ミコーバー コパフィールド君。仮に、年取二十ポンドある男がいて、十九ポンド十九シリング六ペンスさえ使っていれば、その男は幸せだ。だが、もし二十ポンドーシリング使うとなると、これはもうおしまいだ。よく憶えておくんた。

みんな、ラムチョップを食べる。

音楽10

デイヴィッド（少年）倉庫で働く姿。

【9-3】

ベッチーとディックがいる。

デイヴィッド（青年）がそばにいる。

デイヴィッド 僕は、ミコーバーさんの家から、毎日倉庫に通いました。一週間働いて7シリング。何とかやりくりしても、食べて行くので精一杯でした。

ディック、泣き出す。

ディック 君の人生に比べたら、私の回想録なんて、実にくだらね。

ベッチー それで、逃げ出して来たって言うんだね？

デイヴィッド ……はい。

ベッチー あのね。あちらへは、手紙を出しておいたからね。

デイヴィッド あちらって。

ベッチー お父さんにだよ、義理の。

デイヴィッド じゃあ、僕がここにいること、分かっってしまうんですね。

ベッチー そうだね。

デイヴィッド (少年) 僕はどうなるんだろう？

ベッチー あの人たちが来れば、分かることだよ。

デイヴィッド (少年) と (青年) 入れ替わる。

【9-4】

ミコーバーの家の家財がすべてなくなる。

戻って来るデイヴィッド (青年)。

エマ コパフィールドさん、あなたとは随分時間を共にしましたもの、もう他人のような気はしませんのよ。だから、安心して話すんですけども、どうやら、主人は助からないらしいですよ。もうチーズの切れはし以外にはね……家には何ひとつなくなってしまったんですよ。主人は、これから監獄へしょっぴかれるんですよって。

デイヴィッド え？

エマ あの人が釈放されたら、私たち、ロンドンを出るつもりですの。どこか田舎で、うんとひとつ、やってみようと思いますの。

警官に連れられて、ミコーバーがやって来る。

ミコーバー エマ、わたしの天使！

エマ あなたを見捨てるなんて、絶対に出来ません！

家族、抱き合い、泣く。

ミコーバー わたしの方が年かさだし、世間の経験もしておる……要するに、経験と言っても、大体が、貧乏暮らしのことだが。要するに、わたしの助言には耳を

傾ける価値がある、えへん……つまり、わたしはそのアドバイスに耳を傾けなかったばかりに……見ての通りだ。

エマ まあ、あなたったら。

家族、笑う。

ミコーバー えへん。歲月、人を待たず。今日できることは、決して明日に延ばすんじゃない。延滞は時の盗人。盗人は、ひつつかまえておけ！

ミコーバーとエマ、去る。

【10】

ベッチーの家。

マードストーンとジェインの姿。

デイヴィッド マードストーンさんです。

ベッチー ディックさん。頼みますよ。

ディック はいはい。

デイヴィッド 僕は、あっちへ行ってみようか？

ベッチー いいえ。いなくちゃ駄目。

二人は、家の中へ。

ベッチー 失礼でございますけども、あなたは、わたしの甥、デイヴィッド・コパフィールドの家内と結婚なすったマードストーンさんですわよね？

マードストーン その通りです。

ベッチー あの可哀そうな赤ん坊は、あのままひとりですっとしておいた方が、よっぽど幸福せだったし、よかつたんじゃないかしら。

ジェイン おっしゃる通り、弟も、こんな結婚をしなかつた方が、よっぽど幸せだったと思うんですの。

マードストーン 姉さん、黙って。このやっかいな子は、仲間からも、仕事からも逃げ出してしまひまして……

ジェイン 世界中で、一番ひどい子どもですわ。

マードストーン 姉さん、黙って。

ベッチー それで、あなたのお考えは？

マードストーン わたしが責任を持って育てます。これ以上、この件に関してあなたに言う事はありません。ちゃんとした仕事につけます。

ベッチー ちゃんとした仕事？もしこの子があなたの本当のお子さんだったとしても、この子の母親が生きていたとしても、この子が、そのちゃんとした仕事とやらにやられたでしようかね？

マードストーン わたしと姉さんとで、これが一番だと決めたことに、クララが反対するなどということは絶対にないと思いますね。